

聖書：ヨハネの黙示録3 1章9-20節

繰り返し強調していることであるが、ヨハネの黙示録は単なる遠い未来の預言ではない。それは「現在、苦難と戦いの中にある地上の教会に対する、圧倒的な勝利の主からの慰めと励ましの手紙」である。今日のところ、1章後半は、黙示録全体の基調を定める「栄光のキリストの幻」が記された極めて重要な箇所である。

9節. 「わたしは、あなたがたの兄弟であり、共にイエスと結ばれて、その苦難、支配、忍耐にあずかっているヨハネである。わたしは、神の言葉とイエスの証しのゆえに、パトモスと呼ばれる島にいた。」

ヨハネは自らを偉大な使徒としてではなく、「兄弟」また「共に」「与かっている」(κοινωνός、コイノーノス)者として紹介している。「コイノーノス」は、「パートナー、partner」という意味。

ここでヨハネは、キリスト者の現在の姿を3つの言葉で要約している。すなわち「苦難(θλίψει/スリペイ)」「支配(βασιλεία/バシレイア)」「忍耐(ύπομονή/ヒュポモネー)」である。

キリスト者は、主のご支配(王国、御国)に生きるからこそ、その御言葉に従って生きようとするからこそ、この世において「苦難」がある。それはこの世はキリストに敵対するからである(ヨハネ福音書15章18-20節、16章33節参照)。しかし、キリストにある「忍耐(ただ耐えるのではなく、勝利への確信に基づく積極的な忍耐)」によって、キリスト者はこの苦難を歩むことができる。ヨハネ自身もその故に「パトモスと呼ばれる島」に流刑されていた。

10-11節.

「ある主の日のこと、わたしは“霊”に満たされていたが、後ろの方でラツパのように響く大声を聞いた。」(10節)

「主の日(τη Κυριακή ημέρα、テー キュリアケー ヘメラ the Lord's day)」という表現は、新約聖書ではここだけ。これはイエス・キリストが復活された日曜日(週の初めの日)を指し、初代教会が礼拝のために集まっていた日である。

「“霊”に満たされていた(εν πνεύματι、エン・プネウマティ、直訳すると、「霊の中にあつた。in spirit)」という状態は、ヨハネが神の黙示(啓示)を受け取るための恍惚状態に入ったことを示す。

背後から聞こえた「ラツパのように響く大声」は、シナイ山での律法授与(出エジプト19:16)を想起させる。神が全地に語りかける圧倒的な権威の象徴。

その声は、これから見るものを巻き物 (βιβλίον、ビブリオン) に書き、小アジアの七つの教会に送るよう命じる。「七」は完全数であり、この手紙が歴史上の特定地域だけでなく、全時代の普遍的な教会へ宛てられたものであることを示している。

12-16節.

ここから、ヨハネは振り返って声の主を見る。ここに描写されているイエス・キリストの姿は、旧約聖書 (特にダニエル書、エゼキエル書) の神顕現のイメージを用いている。

「七つの金の燭台」。これは後述されるように「七つの教会」のこと。重要なのは、キリストがその「中央」におられること。地上の教会がどれほど迫害され、また (2-3章で見られるように) 罪や妥協を抱えていようとも、主イエスは教会を見捨てることなく、そのただ中を臨在して歩んでおられる。

「人の子のような方」。ダニエル書7章13に由来するメシア的称号 (福音書において主イエスはご自身を「人の子」と言われている。マルコ2章10節、28節、8章31節など)。

「足まで届く衣」と「金の帯」は、大祭司としての執り成しと、王としての尊厳を表している (出エジプト28章)。キリストは、私たちのための大祭司であり、まことの王である。

「白い羊毛に似て、雪のように白く、眼はまるで燃え盛る炎」。ダニエル書7章9節では、永遠の昔からおられる方 (「日の老いたる者」すなわち「父なる神」) の描写であるが、ヨハネはこれをキリストに適用している。すなわち、キリストの完全な神性と永遠性、そしてすべてを見通し、探り出す裁き主としての聖さを表している。

「足は炉で精錬されたしんちゅうのよう」「声は大水のとどろきのよう」。すべての敵を踏み砕く絶対的な力と、エゼキエル書43章2節にあるような、全能の神の威厳ある御声 (権威)。

「右の手に七つの星を持ち」。20節によると、これは諸教会の「天使たち (ἀγγελοι、アンゲロイ、教会の指導者。信徒たち)」。教会の運命は、キリストの右の手の強力な主権と保護の中にある、という圧倒的な安心感を与える。

「口からは鋭い両刃の剣」。これは「神の言葉」である (ヘブライ4章12節、イザヤ49章2節)。キリストは武力によってではなく、ご自身の口から出る真理の言葉によって、敵を打ち破り、世界を裁かれる。プロテスタント、特に改革派が「御言葉の説教」を重んじる神学的根拠もここにある。

「顔は輝く太陽のよう」。マタイ17章1節以下の変貌の山での出来事の成就であり、神の栄光そのもの。

17-18節 a.

「わたしは、その方を見ると、その足もとに倒れて、死んだようになった。すると、その方は右手をわたしの上に置いて言われた。「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者、また生きている者である。」

神の圧倒的な聖さと栄光の前に、罪ある人間は「死んだように」倒れるしかない（イザヤ6章5節、エゼキエル1章28節）。しかし、恐るべき裁き主に見えるこの方は、同時に恵みの主である。主は慰めに満ちた「右手」をヨハネに置き、「恐れるな（Μὴ φοβού。メー・フォブー）」と宣言される。

主はご自身を「最初であり、最後である」と名乗る。これはイザヤ書44章6等で、唯一の主なる神（ヤハウエ）のみに帰される称号である。イエス・キリストこそが歴史の創始者（アルファ）であり、完成者（オメガ）である。

「一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている。」（18b）

これこそが、迫害下の教会に対する最大の慰めである。教会を迫害するローマ帝国（あるいはあらゆる時代の暴君）が持つ最大の武器は「死」の恐怖である。しかし、私たちの主、イエス・キリストは自ら十字架で死を経験し、それを打ち破って復活された。今や、「死と陰府（ᾅδης、ハデス）の鍵（κλεις、クレイス＝権威・支配権）」を持っているのは、ローマ皇帝でもサタンでもなく、イエス・キリストのみである。私たちの生と死は、完全にキリストの主権下にある！

19-20節.

「さあ、見たことを、今あることを、今後起ころうとしていることを書き留めよ。」（19節）

これは黙示録全体の構成を示すと同時に、預言の記録という神聖な務めをヨハネに委ねる命令である。

「あなたは、わたしの右の手に七つの星と、七つの金の燭台とを見たが、それらの秘められた意味はこうだ。七つの星は七つの教会の天使たち、七つの燭台は七つの教会である。」（20節）

最後に、主はご自身で象徴の意味を解き明かされる。「奥義（μυστήριον、ミステーション）」とは、人間の理性では到達できず、神の啓示によってのみ理解できる真理。

ここには、地上の教会の真の姿が啓示されている。世の目から見れば、初代教会は取るに足らない、帝国から弾圧される弱々しい集団に見えたであろう。現代の教会も、世俗主義の中で影響力を失っているように見えるかもしれない。

しかし、靈的・天的な現実（これが黙示録の視座）においては、教会は神の光を世に放つ「金の燭台」であり、その指導者やキリスト者たちは主の右手に握られた「星」である。

終わりに、ヨハネの黙示録1章後半は、苦難を歩む教会に対する大いなる視点の転換の提供である。私たちは地上の現実を目を奪われるとき、恐れと絶望に陥る。しかし、聖霊によって霊の目が開かれるとき、教会のただ中、中央を歩み、「死とハデス（陰府）の鍵」を帯に下げておられる圧倒的な栄光の主、イエス・キリストの姿を見る。主は教会の主であり、歴史の主である。この確固たるキリストの主権と恵みの宣言の上に、これ以降に続く手紙と終末の幻のすべてが基礎付けられている。

*次週聖書研究祈祷会はお休みです。